様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８ＫＫ００５９

研究課題名（和文）子どもの育ちと学びの記録による保育評価とその国際的ネットワークの展開

研究課題名（英文）A Study on the Pedagogical Documentation and ECEC Teacher Networks

研究代表者
浅井　幸子（Asai, Sachiko）

東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・教授

研究者番号：３０３６１５９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は国際共同研究を通して、子どもの学びや育ちの記録が、尺度による保育の質評価に対して、抵抗の実践、あるいはオルタナティブな実践として位置づいている様相を明らかにした。スウェーデンのストックホルムでは、教育ドキュメンテーションが評価のツールとして位置付けられることで、評価ということの意味合いが論争的なものとなっていた。子どもの学びや育ちの尺度による評価が課されているイギリスのイングランドやアメリカのカリフォルニア州では、子どもの学びや育ちの記録として、教育ドキュメンテーションよりもラーニングストーリーやポートフォリオが選択される傾向にあった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は以下の三点において保育・幼児教育に寄与する。（１）尺度による保育の質評価（子どもの評価と園の評価を含む）が導入されている国・地域において、保育施設のレベルで起きている問題を明らかにし、尺度による評価の導入に警鐘を鳴らした。（２）レッジョ・インスパイアの教育ドキュメンテーションに長期にわたって取り組んでいる保育施設において、その実践の調査を行い、日本における教育ドキュメンテーションの理解を進展させた。（３）保育・幼児教育の議論を世界的にリードしている研究者と交流を行い、その領域の学術的なネットワークを形成した。

研究成果の概要（英文）：This research examined the relationship between ECEC quality assessment and pedagogical documentation in Sweden, the UK and California in the USA.
Sweden has a well-established Reggio-inspired ECE and evaluation by pedagogical documentation. However, there is a theoretical-practical controversy with the idea of assessment/evaluation.In England, quality assessment by Ofsted has become government policy and progress has been made in ECEC assessment using scales. In such a situation, issues have arisen as a result of too much emphasis on assessment. In California, a scale-based ECEC quality assessment DRDP has developed. The relationship between such standardised assessments and those using pedagogical documentation and learning stories is complex.

研究分野：教育学

キーワード：ドキュメンテーション　教育ドキュメンテーション　レッジョ・エミリア　保育評価　保育の質評価　レッジョ・インスパイア　リフレクション　リスニング・ペダゴジー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年、保育の質評価の研究が進展している。保育の質が子どもの将来を左右することが指摘され、保育を改善するためのさまざまな評価尺度が開発されている。他方で、尺度による評価の拡大が、保育の技術化や脱政治化をもたらすことに対する懸念が示されている。質の高い保育のためのあらかじめ定められた処方箋が存在し、それを適用することによって成果が得られるという発想が、何が質であるかを定める民主的なプロセスや、専門家である保育者の価値判断の余地を縮小してしまうからである。そのようなグローバルな状況の中で、子どもの育ちと学びを記録することによるオルタナティブな保育の質評価が模索されている。

２．研究の目的

本研究は、子どもの育ちと学びの記録として、レッジョ・エミリア市とレッジョ・インスパイアードの幼児教育において発展してきた記録の様式である「教育ドキュメンテーション」に着目し、スウェーデン、イギリスのイングランド、アメリカのカリフォルニア州について、保育の質評価と教育ドキュメンテーションの関係を検討した。

本研究は、以下の２点において、日本の保育に寄与することを目的とした。

（１）　スタンダードや尺度による保育の質評価の導入に警鐘をならし、オルタナティブな評価のアイデアを示す。

（２）　日本の教育ドキュメンテーションの理論的実践的な発展に寄与する。

３．研究の方法

本研究は「教育ドキュメンテーション」「スウェーデン」「イギリス・イングランド」「アメリカ・カリフォルニア州」の４つの課題ごとに推進した。実践との往還の重要性を鑑み、スウェーデンとイングランドの実地調査については、研究協力園の幼児教育者を同行した。

それぞれの課題について、以下のように研究を進めた。招聘事業と訪問事業の双方についてCovid-19の影響があり、規模を縮小せざるをえなかった。

［教育ドキュメンテーション］

研究期間を通して、主として文献の収集と検討を通して、レッジョ・エミリア市の幼児教育とレッジョ・インスパイアードの幼児教育における教育ドキュメンテーションの理論・実践とその歴史の解明を試みた。

［スウェーデン］

スウェーデンはレッジョ・インスパイアの幼児教育と教育ドキュメンテーションによる評価が定着している。しかし、国全体で教育ドキュメンテーションが用いられているわけではなく、尺度による評価のアイデアとの理論的実践的な論争が見られる。ストックホルムを中心とする教育ドキュメンテーションの展開を明らかにするために、その理論と実践を主導してきたストックホルム大学のグニラ・ダールベリ、インゲラ・エルフストロム、ボディル・ハルバースを共同研究者とした。

2019年度は、11月4日から15日に、ストックホルムとヨーテボリおよびその近郊の視察調査を行った。ストックホルムでは、ステラノバ就学前学校、トリアンゲル就学前学校、ソルバッケンシード就学前学校などを訪問したほか、エルフストロムとハルバースが主催する教育者ネットワーク「ディダクティック・ルーム」に参加した。ヨーテボリとその近郊では、主にダールベリの学校やネットワークの訪問に同行した。ハローネットの就学前学校、ソールグレンタン就学前学校などを訪問したほか、ヨーテボリ大学の公開講座についてペルニラ・モテンソンにインタビューし、レーラムの教育者ネットワーク「サード・スペース」の活動に参加した。

Covid-19の世界的な流行のため2020年度から2022年半ばにかけて、訪問や招聘はできなかった。そこで教育者、研究者に、インターネットで、レッジョ・インスパイアとドキュメンテーションについて聞き取りを行った。対象者はウッラ・メッシング、ミカエラ・スンドベリ、アニカ・スベンソン、インゲラ・エルストロム、カリン・フルネス、ジェーン・ウエンズビイ。

2022年9月にダールベリを招聘し、お茶の水女子大学附属幼稚園、渋谷区立渋谷保育園などを訪問して研究交流を行うとともに、レッジョ・インスパイアとドキュメンテーションに関する勉強会やシンポジウムを行った。

2023年3月に、ストックホルムとその近郊の就学前学校（ウグラン就学前学校、ソルバッケンシード就学前学校、ソルバッケンノード就学前学校、ロンゲ・エリック就学前学校）を訪問し、インタビューを行った実践の具体的な記録を収集した。またストックホルム大学等で、共同研究者と知見の交流を行った。

［イギリス・イングランド］

イングランドでは、政府の監査機関Ofstedによる質評価が政策化されるとともに、ECERSや

ITERS、SSTEW などの尺度を用いた保育評価が進展してきた。そのような状況で、あまりにも評価が重視されることによる問題、たとえば保育者が子どもとかかわる以上に記録に奔走するという事態が問題となり、評価のやり方の改善が図られている。教育ドキュメンテーションを用いている学校は少ないものの存在している他、ポートフォリオやラーニングストーリーを用いている学校もある。本研究では、それらの学校における記録と評価の実践の様相を検討した。ロンドン大学のリン・アンを共同研究者とし、イギリスの中心的なレッジョ・インスパイア校であるメイドレー・ナーサリースクールを協力園とした。

2018 年度には、イギリスの３つの保育学校を訪問し、保育の記録と省察にかかわるデータの収集を行なった。イギリスは数値による評価が進展した国であり、公的に課されている評価と、日常的な保育における子どもの学びや育ちの記録との関係をどのように調整するかということが課題となっている。その多様な取り組みを、３校の記録と評価の組織の仕方に探った。

2019 年度には、上記３校のうちレッジョ・インスパイアードのドキュメンテーションに取り組むメイドレー・ナーサリースクールを再訪した。教師が子どもたちと活動の中でドキュメンテーションを行い、活動後にそれを用いて振り返りをし、翌日の活動をデザインするという一連のプロセスを記録し分析を行った。

2019 年度の 11 月に、イギリスから保育研究者のピーター・モス氏を他機関と共同で招聘し、保育評価およびレッジョ・エミリアの幼児教育に関するシンポジウムや研究交流を行った。

Covid-19 の流行で訪問招聘ができなかった 2020 年度と 2021 年度は、調査の結果の分析と、文献収集による評価制度の検討を行った。具体的には、イギリスの幼児教育評価の改訂(2021 年)について検討を行った。

2022 年度には、ロンドン大学のリン・アンの招聘を行い、お茶の水女子大学附属幼稚園、渋谷区立渋谷保育園を訪問して研究交流を行った。また、セミクローズの講演会を開催し、イギリスにおける包摂と評価について理解を深めた。

［アメリカ・カリフォルニア州］

カリフォルニア州では、尺度による保育の質評価 DRDP が発展している。そのようなスタンダード化された評価と、教育ドキュメンテーションやラーニングストーリーを用いた評価の関係は複雑である。一方では、DRDP のスタンダード化を超えるためにドキュメンテーションやラーニングストーリーが実践されているが、両者が単に対抗的であるというよりは、共存するような記録のかたちが模索されている。公立学校が DRDP を課されているのに対して、私立のレッジョ・インスパイアの学校では、レッジョのようなかたちで教育ドキュメンテーションを用いることが目指されている。教育ドキュメンテーションについて著書のあるミルズカレッジ（現在はミルズカレッジ・ノースイースタン大学）のリンダ・クロール、サンフランシスコ州立大学のダニエル・マイヤーを共同研究者とした。

2019 年 5 月に、アメリカの研究者・保育者グループとの共同研究を東京と千葉で行った。具体的には、国立のお茶の水大学附属幼稚園、私立和光幼稚園、世田谷区の私立認可保育園である経堂保育園、渋谷区の私立渋谷しぜんの国こども園を訪問した。また、保育者養成を行なっている国立大学および私立大学を訪問し、保育記録と評価システムの関係についてレクチャーや意見交流を行った。

2020 年 2 月に、日本の研究者グループがアメリカのカリフォルニア州サンフランシスコとオークランドを訪問し、アメリカの研究者・保育者グループとの共同研究を行った。就学前学校およびキンダーガーデンクラス、保育者養成・研究機関を訪問した。就学前学校では、保育の観察、保育記録の観察、保育者へのインタビューを行った。保育者養成機関では、授業に参加して、学部生・大学院生と研究交流を行った。

2021 年度以降は、文献収集を中心に研究を進め、アメリカのドキュメンテーションとプログレッシブの伝統との関係について検討を進めた。

４．研究成果

以上の研究活動を通して、それぞれの課題について以下のことを明らかにしてきた。以下の知見はシンポジウム、学会発表、論文等で部分的に報告してきたが、現在、それを統合するために、日本と海外の共同研究者で共著の書籍を作成している。

［教育ドキュメンテーション］

レッジョ・エミリアの幼児教育実践における「教育ドキュメンテーション」は、文字だけでなく、写真、絵、ビデオ、音声など多様なモードによって行われる保育の記録である。理論研究と歴史研究を通して、教育ドキュメンテーションについて以下のことを明らかにした。

（１） レッジョにおける「教育ドキュメンテーション」は、子どもと大人の学びにおいて知識を織りなすものであり、学校と地域や保護者をむすぶ公共的なアリーナとして位置づいている。

（２） 「教育ドキュメンテーション」は評価のツールとして発展してきたわけではないが、アメリカにおける評価のオルタナティブの模索（ポートフォリオ）と出会うことによって、評価との関係が考察されるようになった。ドキュメンテーションに、価値を付与し共同構築するという機能が見出され、尺度に対する評価のオルタナティブを模索する潮流の

拠り所となっている。
（3） レッジョ・エミリア市のドキュメンテーションの歴史的な展開をたどるなら、それは、街における幼児教育の公開性を出発点として、子どもの個とグループの学びの可視化のツールとして、子ども、親、教師が探求のプロセスを共有する ツールとして、子どもの声を聴き世界の声を聴くツールとして発展してきた。
（4） ドキュメンテーションの実践の中核は、子どもに耳を傾けることにある。そのことは「リスニング・ペダゴジー」として概念化されている。リスニング・ ペダゴジーは、世界に耳を傾けるという学びのメタファーを提示している。

［スウェーデン］
スウェーデンでは 2010 年のナショナルカリキュラムの改訂において、記録（ドキュメンテーション）を評価ツールとして義務付けた。しかしこれは、必ずしも「教育ドキュメンテーション」ではなく、多様な記録である。その中で、ストックホルム大学のグループは、レッジョ・インスパイアの教育ドキュメンテーションを推進してきた。
グニラ・ダールベリは、教育ドキュメンテーションの最もシンプルな定義を、「教育の（あるいは他の）活動を可視化し、対話、解釈、論争、変革の対象とする過程」としている。その機能は、教育の三つの側面において認識されている。一つめは、政治的側面である。学校を民主的な政治的実践の場として捉えること、市民が子ども期、保育、教育、知識といった重要な課題に取り組むことを可能にする。それは、支配的な言説を可視化し、交渉可能にすることで、市民社会のフォーラムである公共空間を開く。二つめは、倫理的な側面である。教育ドキュメンテーションは、今、ここの出来事に対峙し探究することを基盤とするような人生に対する態度を意味するものとされる。三つめは、認知的・認識的な側面である。教育ドキュメンテーションは、「意味生成の言説」の評価において中心的な役割を果たす点で重要である。「質の言説」における評価が基準に照らすかたちで行われるのに対して、教育ドキュメンテーションによる意味付与としての評価は、人々が自らの意味づけに責任を持つことを可能にする。
このようなドキュメンテーションの理解は、一方では、スウェーデンに特有の文脈において形作られている。スウェーデンの幼児教育関係者は、1992 年から、レッジョと共同で「変容する世界の中の教育」をテーマとするストックホルム・プロジェクトをスタートさせた。このプロジェクトは、ストックホルムの公立の就学前学校をネットワークし、その実践を持続的に変化させることを目指し、ドキュメンテーションはどのように幼児教育を変革するかという実践的な文脈に置かれた。当初はスウェーデンの伝統的な「テーマ活動」から出発したが、それでは従来の記録を変えることはできなかった。そこで小さな場面について、多様なメディアを用いて記録するセッションを行った。こうして教育ドキュメンテーションは、教師が自分の子どもの見方や幼児教育の見方を省察し、子どもの新しい見方と、教育者としての自分自身を新たに構築する場となった 。
もう一方で、スウェーデンのドキュメンテーションの議論は、質保障と評価の議論の拡大という国際的な動向に位置づいている。ドキュメンテーションには、子どもたちと教育者たちに声を付与しコミュニケーションを可能にするという役割が付与されている。「質の言説」が教育を技術的実践へと還元するのに対して、「意味生成の言説」が教育を倫理的政治的実践として捉える。質保障が尺度による評価と結びついているのに対して、意味生成はドキュメンテーションと結びつき、それを公的なアリーナとして位置付けている。

［イギリス］
イギリス（England）ではおよそ 1990 年代以降、保育(学齢未満児の養護と教育)の市場化（民力活用）が進んだ。労働党政権(1997～2010)下の大規模かつ急速な保育拡充は、政府による市場の整備と機能強化、ならびに市場に流通する保育(サービス)の質保証によって実現した。政府は保育基準（Early Years Foundation Stage：EYFS）の枠組みを示し、保育事業者に対して、EYFS に示した学習目標（Early Learning Goals: ELGs）の到達度を子ども一人一人について評定して、結果を提出するよう求めた。評定は、エビデンスに基づいた正確なものであることが要求され、2021 年に EYFS の改訂が行われるまでは、エビデンスとして子どもの行動や発話の記録が求められた。その記録は 17 項の早期学習目標に合わせて整理して提示する必要から、限定的で断片的なものとなる傾向があった。
保育効果の測定は、高等教育機関その他の調査機関の調査研究を通じても行われた。大規模な調査研究を EPPE(The Effective Provision of Pre-School Education,1997-2004;効果的な就学前教育)プロジェクトは大規模な縦断研究で、保育の費用対効果の大きさを実証する成果を上げて世界の耳目を集めた。政権交代後の SEED(Study of Early Education and Development, 2013-2029: 乳幼児期の教育と発達に関する調査)の中間報告もまた、実証的なデータを蓄積して質の高い保育の有用性を明らかにした。これらの研究は、いずれも保育の有用性を、子どもの育ちと学びの数量的な測定方法を用いて明らかにしており、研究に携わったメルウィッシュ(E. Melhuish)、シラージ(I. Siraj)、シルヴァ(K. Sylva)らは質尺度の開発と普及に努めてきた。イギリス・グループは、EYFS 改訂前の公立保育学校４か所（うち１か所は補助期間前）実地調査し、記録を集め、校長のインタビューを行い、以下を明らかにした。
A 校は、校長の強いリーダーシップの下でレッジョ・インスパイア実践を展開している学校で

ある。基本方針として「市民の場・強い絆で結ばれた地域社会の一員／研究する学校／子どもの有能さへの信頼／子どもと家族との協働の場」であることを掲げている。日々の実践においては、子どもの発想に基づいたプロジェクト型の活動を行い、各担任は担当する子どもたちと共同探究を行い、それぞれのスタイルで個別に大判の図画帳に探究の記録を残していた。そのドキュメンテーションを用いて教師たちは日々リフレクションを行い、次の活動をどのように発展させるか協議していた。壁面に写真を用いたパネル記録は保護者と子どもたちが学びの軌跡を確認する手立てとなっている。

B 校では、すべてのスタッフがタブレットを持ちながら子供と活動を行い、タペストリー（Tapestry）というアプリを用いて個々の子どもの活動を写真や文字で記録・整理し、子どもの学習状況を把握するとともに、保護者に日々の様子を伝え、課題を共有するツールとしていた。並行して、各クラスの壁面全体を大きな模造紙で覆って、そこに学校の基本理念と各期間の計画、期間中の日々の様子をどんどん書き込んでクラス及び学校全体の共有の学びの記録としていた。ELGs の到達度評定については、クラスを持たない校長が行っていた。担任には、評定を意識せずに子どもとかかわってもらうためだという。

C 校では、生活の様々な場面で ELGs に対応する記録を取りつつも、ELGs 到達度評定を高めることを目指してはいなかった。学校と大学との共同研究に基づいて ELGs の要素を組み込んだ独自の共通目標を子どもに示し、その到達に向けた働きかけを行っていた。

D 校は長い伝統を誇る学校で豊かな屋外環境を生かした保育で知られる。子どもたちは所属するクラスにかかわりなく、一日の大半を好きな場所で好きな遊びをして過ごすため、ELGs 到達度のための記録は、全職員が残す子どもの様子を示したメモを一人一人の子どものポートフォリオにまとめていく。評定はポートフォリオに基づいて校長、副校長が行うが到達度を高めることに重きを置いているわけではなく、子どもの育ちの現状報告という扱いであった。

政府が学習目標（ELGs）を明示し、保育事業者に対して ELGs 到達度の正確なデータの提出を義務付けてきたイギリスにあっては、そのために膨大な記録を取ることが行われていた。実地調査した保育学校は多様な方法で ELGs 到達度評定を行っていたが、独自の伝統と目標に基づいた環境づくりと子どもの援助、記録の共有を進めており、到達度それ自体を目指す実践を行ってはいなかった。

なお、2021 年度施行の改訂 EYFS においては、達成度評定が簡略化され、評定は教員の専門的判断に従って行えばよく、エビデンスとしての子どもの記録は無用とされた。と同時に、4 歳で小学校付設レセプション学級入学（実質的な義務教育開始時）した時点で個別テスト方式のベースライン評価の実施が義務付けられた。以上から、イギリスにおいては、記録を教育目標（ELGｓ）に照らした到達度評定のエビデンスとして用いることの困難さが証明された反面、子どもの学びと育ちの記録が軽んじられるおそれがある。

［アメリカ］

文献の検討と施設の訪問をとおし、アメリカにおける革新主義の伝統が、保育・幼児教育の段階において継承されていることが見出された。

アメリカでは、とりわけ 2000 年代以降、スタンダードとアカウンタビリティにもとづく教育改革と公教育の民営化が進んできた。その中で、革新的な教育実践は、K-12 の段階においていよいよ困難となってきた。しかし革新的な教育実践は、レッジョ・インスパイアードの保育・幼児教育において多様な展開を見せている。そしてこの展開の中に、デューイ以来の進歩主義教育の伝統と、レッジョ・インスピレーションとの具体的な融合の姿も見出された。

レッジョ・インスピレーションの展開は、カリフォルニア州教育省の DRDP（Desired Results Developmental Profile）など、尺度による発達評価を課されているプログラムにおいても確かめられた。教師たちは、子どもの育ちと学びの豊かさを認識し子どもとの探究的な関係を構築することに重きを置いており、そうした教育実践の手がかりとして、教育ドキュメンテーションやラーニング・ストーリーが位置づいている。尺度による発達評価も、これらを資料としてなされていた。

進歩主義教育の伝統とレッジョ・インスピレーションとを結びつける鍵は、リスニング・ペダゴジーにあった。革新主義の教師たちが実践してきた「聴くこと」「傾聴」の教育学である。

リスニング・ペダゴジーにもとづいた子どもと教師の関係は、評価の関係を越えてゆくようである。このことは、ニュージーランド発のラーニング・ストーリーがドキュメンテーションの一種と位置づけられ、独自の発展を遂げているラス・アメリカス就学前学校の事例などから示唆された。ここにおいて、評価の意味するところや評価の対象の再考が、さらなる課題として浮上した。関連して、教育ドキュメンテーションの特殊性もより明確になった。評価のツールともなる広い意味でのドキュメンテーションに対し、「教育」と付され、レッジョにおけるドキュメンテーションとして存在する教育ドキュメンテーションは、学びの過程そのものと言えよう。アメリカにおけるレッジョ・インスピレーションの検討をとおし、民主的な公共空間としての学校を展望する手がかりが豊かに見出された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計31件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　14件）

１．著者名 浅井 幸子	４．巻 61
２．論文標題 南オーストラリア州におけるレッジョ・インスピレーション	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京大学大学院教育学研究科紀要	６．最初と最後の頁 391～400
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002003517	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 浅井幸子	４．巻 167
２．論文標題 レッジョ・エミリアのドキュメンテーションー歴史的視点から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 発達	６．最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 浅井幸子	４．巻 32
２．論文標題 新しい評価論の構築	５．発行年 2022年
３．雑誌名 児童教育	６．最初と最後の頁 27-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 植松 千喜	４．巻 61
２．論文標題 授業実践における「生徒の声」の可能性と課題 ： ヘンリー・ジルーと多文化教育を手がかりに	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京大学大学院教育学研究科紀要	６．最初と最後の頁 365～373
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002003514	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 植松 千喜	4．巻 44
2．論文標題 教育学における「生徒の声」研究の射程	5．発行年 2022年
3．雑誌名 明治大学教職課程年報	6．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小玉 亮子	4．巻 120-2
2．論文標題 附属幼稚園と大学－研究・教育のパートナーとして－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 幼児の教育	6．最初と最後の頁 20-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 浅井幸子	4．巻 50
2．論文標題 コロナ下における学びの保障	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育方法	6．最初と最後の頁 50-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田素子	4．巻 14
2．論文標題 幼児期における探求的学びの一考察--ストックホルム市立幼児学校の共同研究を手掛かりに	5．発行年 2021年
3．雑誌名 和光大学現代人間学部紀要	6．最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 椨瑞希子	4．巻 31
2．論文標題 アイザックスと現代イギリスの幼児教育評価改革－アイザックスの二つの観察記録再評価の試み－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 聖徳大学研究紀要	6．最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小玉亮子	4．巻 119
2．論文標題 社会の視点から考える幼児教育の試み	5．発行年 2020年
3．雑誌名 幼児の教育	6．最初と最後の頁 34-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 浅井幸子	4．巻 15
2．論文標題 『赤い鳥』と生活綴方における子どもの構築―文化の創り手としての子ども―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 幼児教育史研究	6．最初と最後の頁 50-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 浅井幸子・黒田友紀・北田佳子	4．巻 60
2．論文標題 カナダ・オンタリオ州のレッジョ・インスピレーション	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東京大学大学院教育学研究科紀要	6．最初と最後の頁 645-662
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 織田望美	4．巻 11
2．論文標題 ドキュメンテーションの多様な展開―サンフランシスコ・ベイエリアの保育施設を訪ねて―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 和光大学保育実習センター通信	6．最初と最後の頁 11-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 浅井幸子	4．巻 162
2．論文標題 保育の新たな物語りへ ： 公教育としての保育	5．発行年 2020年
3．雑誌名 発達	6．最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 浅井幸子	4．巻 29
2．論文標題 保育評価のオルタナティブ：ドキュメンテーションの思想	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教育目標・評価学会紀要	6．最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 浅井幸子	4．巻 86(2)
2．論文標題 評価への「抗体」としてのドキュメンテーション：価値・意味生成・翻訳	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教育學研究	6．最初と最後の頁 249-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 太田素子	4．巻 29
2．論文標題 戦後日本の保育実践史と目標評価論	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教育目標・評価学会紀要	6．最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田素子	4．巻 165
2．論文標題 『バーガモッセンと世界』を読む――スウェーデンにおける新たな物語り１	5．発行年 2020年
3．雑誌名 発達	6．最初と最後の頁 36-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 椨瑞希子	4．巻 165
2．論文標題 イギリスの質評価とそれを超える物語り	5．発行年 2020年
3．雑誌名 発達	6．最初と最後の頁 46-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 椨瑞希子	4．巻 10
2．論文標題 カリフォルニア州ベイ・エリアにおける保育評価刷新の試み	5．発行年 2020年
3．雑誌名 聖徳大学大学院教職研究科紀要	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 椨瑞希子	4．巻 7
2．論文標題 現代イギリスにおける保育の記録と評価	5．発行年 2019年
3．雑誌名 子ども学	6．最初と最後の頁 104-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小玉亮子、太田素子、浅井幸子	4．巻 16
2．論文標題 Transitions from Preschool to Primary School Education in Japan	5．発行年 2020年
3．雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	6．最初と最後の頁 185-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小玉亮子	4．巻 162
2．論文標題 さまざまな歴史とさまざまな街 ： 世界の幼児教育におけるレッジョ・インスピレーションの(不)可能性	5．発行年 2020年
3．雑誌名 発達	6．最初と最後の頁 30-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 椨瑞希子	4．巻 29
2．論文標題 日本とイギリスにおける保育の評価－評価スケールの利用と開発の背景－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 聖徳大学研究紀要	6．最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 椨瑞希子	４．巻 7
２．論文標題 現代イギリスにおける保育の記録と評価	５．発行年 2019年
３．雑誌名 子ども学	６．最初と最後の頁 104-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太田素子	４．巻 12
２．論文標題 子育ての歴史と現在――17世紀から21世紀へ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 和光大学現代人間学部紀要	６．最初と最後の頁 226－236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 太田素子	４．巻 45-2
２．論文標題 子どもの心の健康を考えるシンポジウム　子育て文化を考える	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日精診ジャーナル	６．最初と最後の頁 76-82，94-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 浅井幸子	４．巻 86-2
２．論文標題 評価への「抗体」としてのドキュメンテーション：価値・意味生成・翻訳	５．発行年 2019年
３．雑誌名 教育学研究	６．最初と最後の頁 249-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kittaka Yoshie	4．巻 20
2．論文標題 The Art of Listening	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Schools	6．最初と最後の頁 14～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1086/724407	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 椨瑞希子	4．巻 55
2．論文標題 イギリスの保育における「レッジョ経験」とその影響:労働党政権(1997-2010)時代の保育再考	5．発行年 2023年
3．雑誌名 聖徳大学研究紀要	6．最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 ジュリアン・グルニエ、椨瑞希子	4．巻 13
2．論文標題 講演記録 多文化社会イギリスにおける幼児教育の変革-「法定枠組み(EYFS)」2021 改訂と新「公認カ リキュラム指針(DM)	5．発行年 2023年
3．雑誌名 教職実践研究	6．最初と最後の頁 97-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計36件（うち招待講演　7件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 Mikiko Tabu
2．発表標題 Foster the observant eyes to work: a case study of a teacher-education programme in Japan
3．学会等名 EECERA 30th Conference（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 椨瑞希子
２．発表標題 保育の新潮流―ケアと教育の一体化と内容・方法の刷新―
３．学会等名 幼児教育史学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Gunilla Dahlberg, Ingela Elfstrom, Bodil Halvars, 浅井幸子, 小玉亮子
２．発表標題 ペダゴジカル・ドキュメンテーションの理論的・実践的な可能性
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 浅井幸子
２．発表標題 RECE（Reconceptualizing Early Childhood Education）ネットワークと その議論の展開
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 浅井幸子
２．発表標題 南オーストラリア州におけるレッジョ・インスピレーション
３．学会等名 日本教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 浅井幸子
２．発表標題 レッジョ・インスパイアのリスニング・ペダゴジー
３．学会等名 日本教育方法学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 橘髙佳恵
２．発表標題 進歩主義教育におけるリスニング・ペダゴジー
３．学会等名 日本教育方法学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 太田素子・浅井幸子
２．発表標題 プロジェクト・アプローチの研究（２）１・２歳児「渦」の分析を手がかりに―
３．学会等名 日本保育学会第73回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 浅井幸子・太田素子
２．発表標題 プロジェクト・アプローチの研究(1) ―“Tree"のドキュメンテーションとリフレクション―
３．学会等名 日本保育学会第73回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 太田素子
２．発表標題 幼児期における探究的学びの一考察―スェーデンS行政区公立保育者の共同研究を手掛かりに
３．学会等名 日本教育学会第79回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 椨瑞希子
２．発表標題 イギリスにおける評価の実際－国の制度と伝統園の対応－
３．学会等名 日本保育学会第７３回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 髙橋 陽子、小玉 亮子、佐藤 寛子
２．発表標題 動き出すドキュメンテーション(1) ―保育者と保護者の関係と対話をキーワードとして―
３．学会等名 日本保育学会第73回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 佐藤寛子、小玉亮子、髙橋陽子
２．発表標題 動き出すドキュメンテーション(2) ―保育者と保育者の関係と対話をキーワードとして―
３．学会等名 日本保育学会第73回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 橘髙佳恵
２．発表標題 アメリカ保育施設訪問記：革新の系譜の現在を探る
３．学会等名 アメリカ教育史研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 浅井幸子
２．発表標題 学びの主体としての子ども
３．学会等名 日本教育方法学会第23回研究集会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 椨瑞希子
２．発表標題 英国の発達研究とアイザックスの記録
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 浅井幸子
２．発表標題 日本における保育実践記録の試み
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 太田素子
２．発表標題 レッジョ・アプローチと教育ドキュメンテーション
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tabu, Mikiko
２．発表標題 What is “quality transition”? —Examination of transition from early childhood education to primary education from a historical perspective—
３．学会等名 World Education Research Association（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ohta, Motoko
２．発表標題 Plans of Infant School in the 1970's and Inquiries into transition from Kindergarten to Primary Education：Researches on Curricula in two Kindergartens.
３．学会等名 World Education Research Association（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Asai, Sachiko
２．発表標題 Early History of the discussion on the transition
３．学会等名 World Education Research Association（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kodama, Ryoko
２．発表標題 A new trend: 1990‘s and after
３．学会等名 World Education Research Association（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tabu, Mikiko
２．発表標題 Capture the efficacy of project approach in a Japanese ECEC curriculum
３．学会等名 EECERA ANNUAL CONFERENCE（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Asai, Sachiko, Ohta, Motoko, and Kodama, Ryoko
２．発表標題 Two types of the transition from preschool education to primary school education in Japan
３．学会等名 EECERA ANNUAL CONFERENCE（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kodama, Ryoko
２．発表標題 What is a quality of early cildhood education in the age of mesurement
３．学会等名 The annual conference of early childhood education, CSE（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 太田素子
２．発表標題 日本の保育実践史と目標評価論
３．学会等名 教育目標評価学会第29回大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 浅井幸子
２．発表標題 保育評価のオルタナティブ ―教育ドキュメンテーションの思想―
３．学会等名 教育目標評価学会第29回大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 浅井幸子・椨瑞希子・太田素子・小玉亮子
２．発表標題 保育記録の系譜―子ども研究と新教育の国際的展開
３．学会等名 日本保育学会第72回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 椨瑞希子、グニラ・ダールベリ、ルイーズ・ロウイング、浅井幸子
２．発表標題 ドキュメンテーションが拓く探究的な学びの世界―イギリスとスウェーデンの実践から-
３．学会等名 日本保育学会第75回大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小玉亮子、浅井幸子、椨瑞希子、太田素子、橘高佳恵
２．発表標題 スウェーデンの幼児教育におけるレッジョ・インスピレーション
３．学会等名 日本教育学会第81回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Sachiko Asai, Ryoko Kodama and Motoko Ohta
２．発表標題 Reggio Inspiration in Japan: from the 1980s through the 2010s
３．学会等名 EECERA ANNUAL CONFERENCE, Glasgow, Scotland 23rd（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 浅井幸子
２．発表標題 ドキュメンテーションにおける写真
３．学会等名 乳幼児教育学会第32回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 小玉亮子・宮里暁美
２．発表標題 保育のグランドデザインを考える1
３．学会等名 日本保育学会第75回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 高橋陽子・小玉亮子
２．発表標題 保育のグランドデザインを考える2
３．学会等名 日本保育学会第75回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kodama,Ryoko, Takahashi,Yoko & Sato, Hiroko
２．発表標題 Documentation in Japan:Focusing on the significance of dialogue
３．学会等名 EECERA ANNUAL CONFERENCE, Glasgow, Scotland 23rd（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 橘高佳恵
２．発表標題 実践に見るリスニング・ペダゴジ―現代アメリカにおけるレッジョ・インスパイアードの保育・幼児教育から―
３．学会等名 日本保育学会第75回大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計9件

１．著者名 幼児教育史学会監修、太田素子・湯川嘉津美編、椨瑞希子ほか	４．発行年 2021年
２．出版社 萌文書林	５．総ページ数 346
３．書名 幼児教育史研究の新地平	

１．著者名 太田素子、小玉亮子、福元真由美、浅井幸子、大西公恵	４．発行年 2022年
２．出版社 不二出版	５．総ページ数 118
３．書名 幼小接続資料集成　別冊	

１．著者名 北欧教育研究会	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 248
３．書名 北欧の教育最前線	

１．著者名 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター、秋田 喜代美	４．発行年 2021年
２．出版社 中央法規出版	５．総ページ数 898
３．書名 発達保育実践政策学研究のフロントランナー	

１．著者名 秋田 喜代美、松本 理寿輝、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター、まちの保育園・こども園	４．発行年 2021年
２．出版社 中央法規出版	５．総ページ数 179
３．書名 保育の質を高めるドキュメンテーション	

１．著者名 北村友人・佐藤真久・佐藤学編	４．発行年 2019年
２．出版社 学文社	５．総ページ数 284
３．書名 SDGs時代の教育　すべての人に質の高い学びを	

１．著者名 小玉亮子編	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 201
３．書名 『幼児教育（MINERVAはじめて学ぶ教職 20）』	

１．著者名 幼児教育史学会、小玉亮子、一見真理子	４．発行年 2022年
２．出版社 萌文書林	５．総ページ数 392
３．書名 幼児教育史研究の新地平	

１．著者名 グニラ・ダールベリ、ピーター・モス、アラン・ペンス、浅井　幸子	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 380
３．書名 「保育の質」を超えて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

驚きと創造性に耳を傾ける:スウェーデンのレッジョ・インスピレーションとの対話
http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/eventlisting/20210509sympo/
保育とデジタル～その役割と可能性～
http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/project_report/symposiumseminar/intlsympo_digital-in-ece-its-role-n-potentiality
「ドキュメンテーションとストーリーによるアメリカの幼児教育における評価とは」
http://www-w.cf.ocha.ac.jp/iehd/20190524event/
「レッジョ・インパクトを再考する」開催報告（共催シンポジウム）
http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/project_report/symposiumseminar/
共同国際シンポジウム「新しい保育の物語　～保育の質・倫理と政治・リアルユートピア～」開催報告
http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/project_report/symposiumseminar/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	乙メ　佳恵（橘高佳恵） (Kittaka Yoshie) (10827554)	横浜国立大学・教育学部・講師 (12701)	
研究分担者	楢　瑞希子 (Tabu Mikiko) (30269360)	聖徳大学・教職研究科・教授 (32517)	
研究分担者	小玉　亮子 (Kodama Ryoko) (50221958)	お茶の水女子大学・基幹研究院・教授 (12611)	
研究分担者	太田　素子 (Ohta Motoko) (80299867)	和光大学・現代人間学部・教授 (32688)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	植松　千喜 (Uematsu Kazuki)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	織田　望美 (Oda Nozomi)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計7件

国際研究集会 多文化社会イギリスにおける幼児教育の最前線	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 驚きと創造性に耳を傾ける　：スウェーデンのレッジョ・インスピレーションとの対話	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 保育とデジタル～その役割と可能性～	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 ピーター・モス講演会「新しい保育の物語 ： 保育の質、倫理と政治、リアル・ユートピア」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 ピーター・モス、佐藤学対談「レッジョ・インパクトを再考する」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 ドキュメンテーションとストーリーによるアメリカの幼児教育における評価とは	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 保育者養成における探究・省察・記録とは	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
スウェーデン	ストックホルム大学			
米国	サンフランシスコ州立大学	ミルズカレッジ		
英国	ロンドン大学IoE			